

(曾於郡志布志町夏井字牟田)

位置と環境

本古墳は町の中心部から東に約6km離れた標高約50mのダグリ岬にある。昭和38年の国民宿舎ダグリ荘建設により主体部を含めた墳丘の大部分を消失している古墳である。

調査の経緯

発掘調査は国民宿舎ボルベリアダグリの建設に伴い、志布志町教育委員会が調査主体となり、平成10年、11年に発掘調査が実施された。

遺構と遺物

本古墳は墳丘の大部分を消失しているが、昭和38年当時の工事前の測量図から全長約80mの前方後円墳であることが推定されている。

古墳の主軸は前方部を西に、後円部を東に向けた東西方向である。墳丘高は後円部で4.5m、前方部で1.5mを有し、前方部が低く平坦になっていたようである(第2図)。

前方部の墳端があまり広がりのない、ほぼ長方形に延びた形が予想されることから、墳形は柄鏡式前方後円墳の可能性が高い。

遺物は、壺形埴輪、ガラス製勾玉、丸玉、小玉等が工事中発見で表面採集されている。

調査の結果、古墳時代(5世紀初頭)の遺構や遺物が検出された。

遺構は、古墳の外表施設である葺石列の一部(第3図)を検出(全長9.1m、最大幅1.6m)し、葺石の基底部には根石と考えられる直径30~60cmの河原石を一列に並べた後、その上に直径30cm程度の石を一段積み上げている様子が窺えた。

さらに、不規則に直径20~30cmの石を配置し、その石と石との空白部分に、直径10~20cmの石を斜面に突き刺すように積み上げてられていた。

遺物には、壺形埴輪、器台形埴輪、円筒形埴輪等



第1図 飯盛山古墳の位置

が出土した。

壺形埴輪(第4図1~3)は、そのほとんどが大きく外反する口縁部(単口縁)をもつもので、胴部は長胴化の傾向が認められるとともに、底部は据置を目的とした底部拡張(粘土を貼り付けて外方へ突き出す)が認められる。

このことから、壺形埴輪の最終段階(5世紀初頭)時期であることが妥当であろうと考えられる。

器台形埴輪(第4図5~7)は、胴部からやや内傾しながら立ち上がり、口縁端部が短く外反する形態である。

壺形埴輪の中には器壁の厚いものが多いが、薄手のものが存在することは、器台形埴輪の存在を含めて興味深い内容となっている。

円筒形埴輪(第4図8~11)は、口縁部が外反するものと直口気味に立ち上がるものの両方が存在し、壺形埴輪と同様にその大きさに一貫性は認められないようである。

また、円筒形埴輪の胴部に接合はしていないものの、断面三角形の突帯も認められる。

特徴

九州でも類例の少ない壺形埴輪等が検出され、貴重な資料提供となった。

資料の所在

出土遺物は、志布志町埋蔵文化財収蔵整理作業室に保管されている。(一部、鹿児島県歴史資料センター黎明館が所有。)

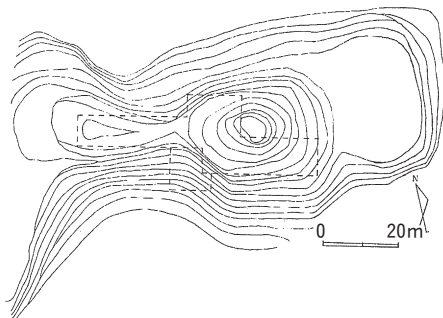
参考文献

上村俊雄1970『飯盛山古墳とその周辺』九州考古学 39・40

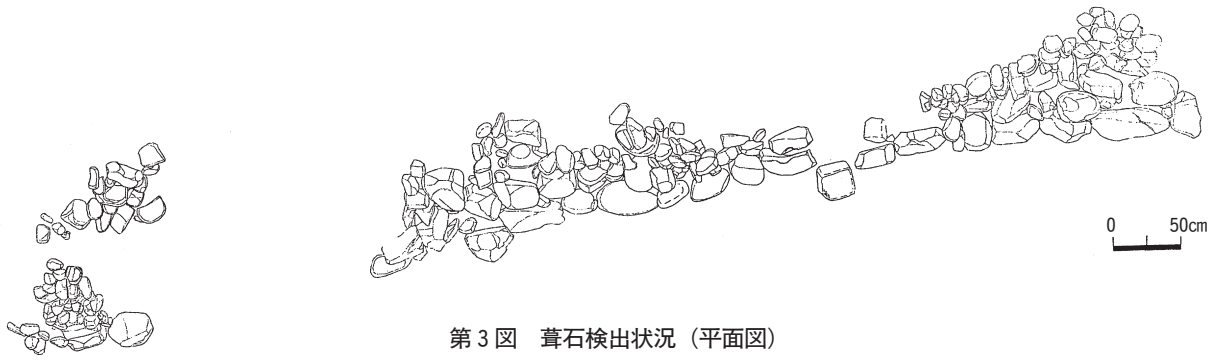
志布志町1979『志布志町町誌』

河口貞徳1988「鹿児島」『日本の古代遺跡』38

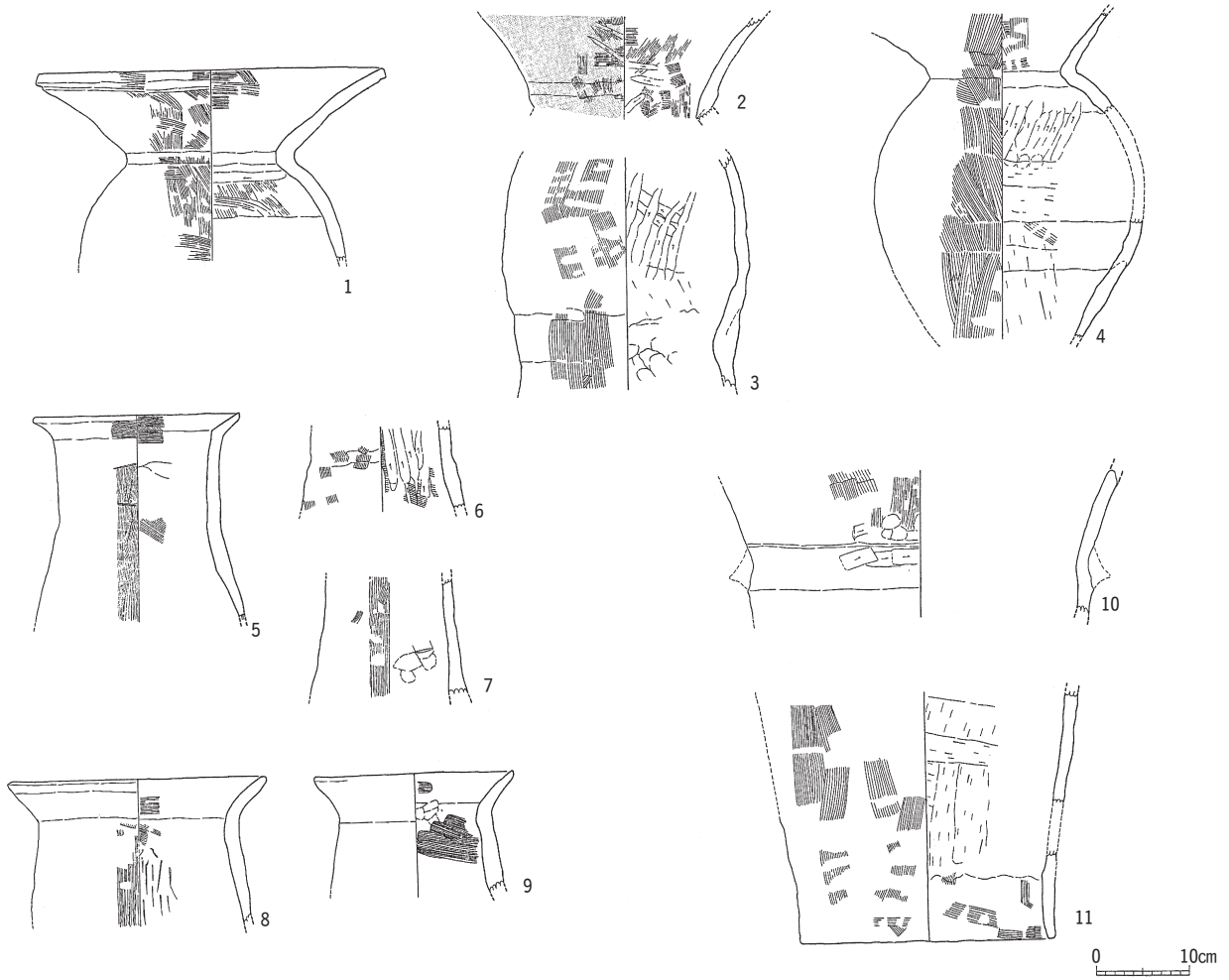
(小村美義)



第2図 飯盛山古墳墳丘測量図(工事前)



第3図 葺石検出状況（平面図）



第4図 出土遺物